

けもの No.02

イノシシ

農作物被害危険度



体長：100～150cm 程度
 体重：50～100kg 程度
 嗅覚：優れている
 視覚：あまり良くない

喜多方市鳥獣被害対策実施隊が
 お送りする野生鳥獣に関する情報紙です。
 過去の掲載記事はホームページをご覧ください。



けもの新聞

The Wildlife Times



イノシシの生態



- ・鼻先で70kgの物を持ち上げることができる
- ・足も速い（時速40km）
- ・障害物に対して、飛び越えるより下をくぐり抜ける傾向が強く、20cmの隙間があればくぐり抜ける
- ・雑食性で、木の根や虫などなんでも食べる
- ・本来は日中活動
- ・寿命は5～10年
- ・2歳で出産可能になり、4～6月に出産する
- ・一度に4～5頭出産（最大8頭）するが、半数程度は自然に死ぬ
- ・母親と子で群れを形成する
- ・本来臆病だが、慣れが進むと大胆になる

本 市においては、東日本大震災以降に頻繁に出没するようになったと言われているイノシシ。令和2年度には、金額にして約670万円という過去最悪の農作物被害を発生させました。他にも田畑の畦畔の掘り起こしなど、今なお甚大な被害を出し続けている、耕作者の頭を悩ませる厄介な動物です。

イノシシは、全国的にも生息域の拡大・生息数の増加が大きな問題となっています。本市においても積極的な捕獲活動を実施しております。

り、昨年度は、276頭を捕獲・駆除しています。捕獲頭数は、実施隊結成当初の平成27年度が0頭だったのに対し、年々増加の一途を辿っています。

一方で、積極的な捕獲や電気柵などの普及により、令和7年度の農作物被害金額は約24万円まで減少し、対策による成果は確実に上がっているところです。

さて、話しは戻り、年間276頭の駆除という数字について、皆さんは多いと感じますか？それとも少ないと感じますか？

イノシシの分布拡大と現在



けものと人間の戦いの歴史

左の写真は「しし垣」と呼ばれるもの。石を積み、イノシシなどの侵入を防ぐための壁であり、古くは鎌倉時代の文献に記述がある。小豆島には 120km に及ぶ長さのものもある。つまり、獣害対策の歴史は古く、先人たちも知恵を絞り、多大な労力をかけて対策してきたということがわかります。

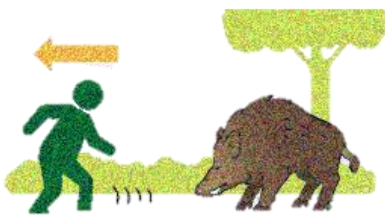
電気柵購入支援事業

現代版「しし垣」と言っても良い電気柵。正しく張られた電気柵の効果は非常に高く、さまざまな獣種の侵入を防ぐことが期待できます。

設置・購入を検討される方は、購入に対する補助事業を行っていますので、問い合わせてください。



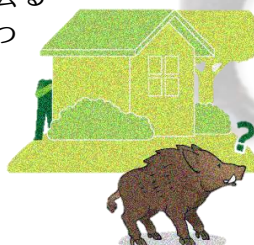
イノシシの人身被害



イノシシによる人身被害は、全国的に見れば毎年数十件程度発生しています。

これまでに数件死亡する事故も起きていますが、それは捕獲の現場において、捕獲者が振り返りに合うケースがほとんどであり、このことから見ると、人身被害(死亡事故)のリスクは、クマに比べて低いと言えます。

とは言え、もしイノシシに遭遇したら、襲われないように、刺激せず物陰に隠れるか、高い場所へ移動して過ぎ去るのを待つことが賢明です。



しかし、ここで一つ課題があります。出沒(被害)は駆除の構図はいつまで続くのでしょうか、またそれは誰がやるのでしょうか。もしも、イノシシがこのまま増え続け、駆除しても駆

除しても状況は変わらなかつた場合、そのうち人間側が疲弊し、人間とイノシシの戦いは、消耗戦の末人間が負けてしまうのではないのでしょうか。

イノシシを含む鳥獣被害は、全国的に見ても、駆除のみで解決に至った例はありません。なぜなら、一頭駆除しても別の個体が入り込んでくれば同じ状況の繰り返しとなるからです。効果的な対策とは、しっかりと農作物を守り(被害防除)、獣に栄養を与えず頭数を増やさず、動物の出沒にくい環境を整え(環境整備)、それでも残る厄介な個体を狙い撃つ(捕獲)、という

イノシシは本市においてもここ数年で人里近くや市街地周辺で目撃されることが多くなりました。昨年度は、小学校の校庭を掘り起こした、などということもありました。やはり自分たちの生活圏に大きな獣が侵入して来れば怖いものです。それに加え、丹精込めて育てた野菜などを食べられたりすればなおさら「駆除しなくては」となるでしょう。

鳥獣被害対策実施隊は、日々獣と対峙し、捕獲や駆除といった戦い方を実践しています。皆さんは、皆さんのできる戦い方をそれぞれ実践することで、この戦いを前進させていきたいと考えています。

3 本柱の対策を複合的に実施していくことです。必死に生きる獣と対峙する時、人間も必死にならないければなりません。そしてそれは、捕獲・駆除の現場に限りません。鳥獣被害対策は、獣対人間の、互いの生活を懸けた戦いであると捉え、私たち一人一人がそれぞれの戦い方で対峙していく必要があります。

イノシシとの(それぞれの)戦い

3 本柱の対策を複合的に実施していくことです。

必死に生きる獣と対峙する時、人間も必死にならないければなりません。そしてそれは、捕獲・駆除の現場に限りません。鳥獣被害対策は、獣対人間の、互いの生活を懸けた戦いであると捉え、私たち一人一人がそれぞれの戦い方で対峙していく必要があります。